

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

2023年 6月 30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職名・学年 研究員

氏名 杉山 由里子

助成の種類	令和5年度・国際研究集会発表助成			
研究集会名	アフリカの未来:アフリカ研究に関するヨーロッパ会議 African Futures: European Conference on African Studies			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )			
発表題目	喚起的な繋がり:ボツワナ共和国における移住政策と狩猟採集民サン Evocative Bonds: A Relocation Policy and the San in Botswana			
開催場所	ドイツ・ケルン・ケルン大学			
渡航期間	2023年 5月 29日 ~ 2023年 6月 10日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )			
会計報告	交付を受けた助成金額	120,000 円		
	使用した助成金額	120,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費目	金額 (円)	
		航空運賃		
		宿泊費	110,175	
		滞在費	36,725	
学会参加費				
その他				
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 現地で生活するにおいて、円安と物価高騰の影響を実感しました。所属先の科研費ではカバーされなかった宿泊・日当に助成金を充当できたことで、大変助かりました。また、募集要項に記載されていた助成の対象となる国際大会の期間よりも3日早い出発となりましたが、柔軟に対応してくださりとてもありがたかったです。			

## 成果の概要／杉山由里子

国際研究集会発表助成制度から助成いただき、ドイツのケルン大学グローバル・サウス研究センター (University of Cologne, Global South Studies Center) にて開催された「アフリカの未来 2023 (African Futures 2023)」に参加し、口頭での研究発表を行った。この国際研究大会は、ヨーロッパを拠点にアフリカ研究を行う研究者や関係者が集う、第9回欧州アフリカ研究会議 (The 9<sup>th</sup> European Conference of African Studies) の一環として開催された。本研究大会は本来 2021 年 6 月に開催される予定だったが、パンデミックの影響により 2023 年に延期されたものである。ヨーロッパはもちろんアメリカやアフリカ大陸はじめ 80 カ国から約 1900 人が参加し、245 のパネルと 1400 件の研究が発表された。このうち日本人の参加者は 5 名であった。非常に熱気に溢れた大会で、このような雰囲気の中で発表できたことを光栄に思うと同時に、これからの研究に対するモチベーションがより高まった。

本研究大会の全体のテーマは、アフリカの過去、現在、そして未来の世界との関わりについて、アフリカ大陸の重要な役割を文化、環境、歴史、政治、言語の側面から探ることである。その中でも報告者が参加したのは、文化に分類された『家族の記憶とアフリカの未来 (Family Memory and African Futures)』と題されたパネルで、ガーナ、ナイジェリア、ケニア、ボツワナで調査をおこなう計 8 人が発表した。このパネルは、近年アフリカの多くの人々が移住し離れて暮らすようになるなかで、彼らの記憶こそが家族を繋ぎ合いたた帰属意識を与えているのではないか、という視点に基づき、アフリカにおける家族の記憶とその実践のあり方をテーマとしたものである。午前と午後の部に分けてパネル発表が行われたが、1 日を通して会場は満員となり、現在のアフリカにおいて“記憶”や“家族のあり方”が、多くの参加者の興味を引くテーマであることを実感した。

報告者は「喚起的な繋がり：ボツワナにおける移住政策とサン (Evocative Bonds : A Relocation Policy and the San in Botswana)」という題名で発表した。発表の内容は、近代化政策や他民族との接触の過程の中で、狩猟採集社会自身が弱者としての記憶を再構築し、またアイデンティティを反映させた「私たち」としての繋がりを見せているようすを明らかにしたものである。近年国際的にも注目されている、ボツワナにおける埋葬に関する裁判を扱ったため、沢山の質問やコメントをもらい、多くの参加者から興味を持ってもらえた。

パネルでは、全体の総合討論が設けられ、口頭発表者同士のディスカッションや全体からの質疑応答の時間が約 1 時間設けられた。パネルを通して、今のアフリカにおいて「家族」とは何かや「記憶の実践のあり方」など、報告者自身も問いとしてきたことを議論することができ、とても充実した時間であった。パネルが終了した後も、発表と議論を聞いてくださった研究者の方々がコメントをしにきてくれ、国際学会で口頭発表することの意義を実感した。また、今回の発表の内容は、国際ジャーナルに発表する予定の論文の内容であった。研究者との議論が、私自身が面白みを感じている点と合致しており、論文を投稿する前に自信をもらった。この助成金により得ることのできた経験を今後の研究に活かしていきたい。